書　評

Heimpel, Hermann: Die halbe Violine. Eine Jugend in der Haupt- und Residenzstadt München. Insel Verlag, 1958. 302 S.

ヘルマン・ハインペル「小さな提琴，首府ミュンヘンの一少年」

阿　部　謹　也

I

ハインペルは1901年にミュンヘンで生れ，ミュンヘン・フライブルク両大学で歴史を学び，1946年以来ゲッチンゲン大学で中世史の教授をしている．はじめベロウのもとで経済史を学び，のちにはフィンケを通してドイツ中世一般史を専攻し，最近は歴史解釈，さらにこの二・三世代の経験にもとづいて，ドイツ史全体の理解の問題に携わっている．特に中世後期の分野で，帝国議会文書の編集等の仕事によってその重厚且つ深い理解力を示し，西ドイツにおける指導的な歴史学者としての地位を得ているが，《現在》における自分の生を直視し，その深みから学問研究を行なおうとする態度は，当然《中世史家》の枠を越える考察に迄彼を導いている．彼がただの中世史家でないことは戦後書かれた，2・3 の論文集で覗われるが，なによりも中世史・現代史を問わず，ドイツ史学界に彼の影響が深いという事実がそのことを雄弁に物語っている．R. Wittram, E. Deuerlein といったそれぞれ専門を異にした研究者の著書を見れば，戦後ハインペルが西ドイツの歴史学界で，派手ではないが深い土壌のような役割を果していることがわかるだろう．

彼は歴史を発展の相の下に把えようとしているのではない．すなわち，新しいものの立場から，その新しさのよって来る経過を直線的に辿ろうとしているのではなく，chronologisch に確定されるひとつの時代の中で生き，その時代と和解して，その時代の人間の意識を探ることから始めるのである．成程，これはヒストリスムスの伝統をつぐ態度にちがいはない．しかし，ヒストリスムスがひとつの生活感覚である以上，ハインペルという個人の生活と，そこから滲み出てくる研究活動を通すいがい彼の方法を理解することは出来ないだろう．

ドイツは国際協調が叫ばれる20世紀になって，国家統一を叫ばなければならないという悲劇的状況にあるが，なによりも痛切なのは，ナチス時代とそれに続く 1945 年の敗戦・分割をドイツ史の一環として，苦しいことにはちがいないが，厳しく，しかも寛容をもって組み入れねばならないことである．そのためには，現代史研究をこのような意識において行なわねばならないことはいうまでもないが，ナチス時代と以後の動揺を体験した者こそ，たとえ中世研究者であっても，自己省察の義務をみずからに課さねばならない．戦後，彼の歴史研究の再出発に当って，まず自己省察を通して 1901 年から 1920 年に至るみ

ずからの精神形成を再体験してみようとしたところに彼の歴史学者としての面目がある，と私は思う．

本稿であつかう書物は通常の自叙伝ではない．1870年から1914年に至る時代は，ドイツ市民社会としては《異例の時期》であり，そのうちでハインペルが20歳まで過したミュンヘンとともに，彼の精神形成に決定的な役割を果している．従って，この時期の自己を省察することは，老人の回想ではなく出発なのである．私達にとっては，ハインペルの少年時代を観察することによって，彼の歴史的感覚がどのようにしてはぐくまれてきたかを見ることが出来るし，さらに重要なことは，彼が自分の少年時代をふりかえってみるその仕方に，彼の歴史的思惟のありかたが浮彫りされている，という点である．

II

ドナウの支流，イザル河畔のアテネといわれるミュンヘン，その象徴でもある新・旧ピナコテークは，異国人や大人にとっては絵画館であったが，ミュンヘンの子供にとっては緑樹と芝のおりなすそのたたずまいこそ，ふたつの世界であった．この世界をめぐって輪廻しで遊ぶボブは，ヘス街に父母とふたりの姉，女中とともに住んでいた．1889年代に購入された家具は古かったが手入れが良く行届いていた．両親は，《人間はその成長のどの過程においても一個の人格であり，尊敬に値する存在なのだ》という観方から思いやりを教育の唯一の原則にしていたので，当然子供も両親の午睡を妨げないように努めていた．しかし，家の秩序は多少タイラントなところもあったが，父親の習慣を特別に思いやることによって保たれていたのである．バイエルン農家出のふたりの女中もボブに大きな影響を与えたが，彼女等の部屋でボブはカトリック教徒を知り，それがプロテスタントと違う香りを持っていることも感じとっていた．ボブをとりまいてその精神形成にあづかっていたものには，このような思いやり，習慣，両親の信頼等のほかに，ふたりの姉クリスチナとエルヴィナがいた．

《人間は一生のどの段階においても完結したものであり，どの時期にも星が瞬き，どの年代においても大きな恵みが用意され，何時でも愛によって生きる》．ボブが5歳のこの頃，クリスチナは16歳，エルヴィナは14歳の少女で，クリスチナはどちらかというと明るく，常にすべてを，楽しみも苦しみも含めて享受していた．ボブは彼女から《為さねばならないことは徹底的に為し，在らねばならないものに成りきる》ことを学んだ．エルヴィナは真面目で几帳面な少女で，彼女の手にかかるとすべてはきちんと整頓されていた．このふたりの姉をボブは心から愛しており，舞踏会のためのよそおいをしたふたりは，ボブにとって人間の美のシンボルですらあったのである（I，II）．

このような家庭から外へ出ると，そこには《日常生活の小秩序》としての古きミュンヘンがあった．第一次大戦前のミュンヘンでは，買物といえば日々の生活を美しくするものに限られており，母や姉と出掛ければ誰にも邪魔されずに水入らずで過せたばかりか，常に市中の人々から祝福されさえしたのである．《Beehren Sie uns bald wieder》何回となく繰返されるこの言葉は，ひとつの Liturgie でもあった．ボブがロトマンの壁画で初めて古代を知り，マクシミリアン＝ヨゼフ，オットー＝フォン＝ヴィテルスバッハ，アルブレヒト＝フォン＝バイエルン，バルバロッサ等の記念碑をつうじて，バイエルン史を幼ない目にうつしたのもこの買物の途中であった．

1907年にはトルコ街の学校に入学したが，いたずらであまり出来のよくないボブは，教師に対して初めて不安という感情を知ったくらいだった．算数は不得手で，むしろ初めは Schreiber になろうと考えていた．自由主義的な父親が選んだこの学校は宗派混合学校であり，そこでボブはゲレス街に住む貧

しい友人を知り，ゲレス街の太陽はピナコテークの木々の間からそそぐ太陽とはちがうらしい，ということにも気がついていた，音楽を好んだボブは，一方シュワービング街へ提琴を習いに通った．30歳の女教師エリカは，モーツアルト時代から抜け出て来たような古風な女性だったが，ボブは心から畏敬し，大学へ入る迄10年間の友情を結んだ．小さなボブが聞いたモーツアルトやベートーヴェンは，大人になって聞いた同じ作品とどんなにちがった響きを持っていたことだろう．エリカの許で，彼は規則正しい努力が如何に幸福であるかも学んだのである（Ⅲ，Ⅳ，Ⅴ）．

彼の父はイザル峡谷鉄道の技師でかなりの地位にあったが，山登りを好んでいたことからも解るように静謐を好み，農民的ですらあった．折から起ったモロッコ事件についても政府側に賛意を示していた．平穏と自由を守る為に，彼はシーメンスの招聘も断わり，1910年にミュンヘン郊外のグライナウに居を移し，ここにボブのグライナウ時代が始まったのである．ツークシュピッツェ，ヴエッターシュタインの山々を望む田園の日々は，ボブにとって最も神と身近な生活であった．そとに木枯らしを聞きつつ浴槽に身を沈めて遠く山々を眺めながら瞑想に耽る時，父親との庭作りの合間にリンゴの枝の上でホメロスを読む時，さては晩鐘，午餐，休息とリズムをもって過ぎてゆく労働と真摯な日々の秩序の中で，10歳のボブは神と共にある，ということを感じとっていたのである．

こうして，グライナウでの週の毎日はそれぞれの色彩をもって過ぎていったが，特に際立った色合をもっていたのはやはり日曜日であった．家族と共に聖マルクス教会へ行き，その帰りに芸術院の展示を見るのが習わしだったが，ピナコテークやホーフブロイハウスにはあまり行かなかった．彼等の生活は，外国人の言う《ミュンヘン的》ではなかったのである．ボブにとっては，エルプスホイザーで摂政宮のパイ Prinzregententorte を買うことが最大の楽しみだった．ミュンヘンの子供にとっては，このパイはラートハウスの前に立っている摂政宮の銅像と同様に平和な時代の記念なのである．

ミュンヘンに数多い記念碑の中でも，1789 年にフランス市民によってバスチーユが攻撃された同じ年に，バイエルン公からミュンヘン市民に贈られた《エングリッシェ・ガルテン》程市民にとって大切な場所はない．その建設の事情が暗示しているように，この庭園はあらゆる人々に開かれた憩の場所であり，ミュンヘン市民がお互いに心おきなく自らを打明けることが出来る場所であった．もう12歳になり，エアハルトと呼ばれるようになったボブも，終生 Ancien régime を自分の周囲に引留める事に生き甲斐を感じていたアンナ伯母とこの公園を散歩し，すべてのものを包むひとつの世界としてのこの庭園の雰囲気の中で生きていたのである（Ⅵ，Ⅶ，Ⅷ，Ⅸ）．

《人間とは何か，それは記憶を持つ存在である．天使は神自身を見るから記憶を持たない．人間は記憶を持つ，彼は神を知りながら神を見ず，常にその途上にあるからである．その道は自己への帰路，真に自分自身であり得る本源へ，すなわち神への帰路である．》1913 年の夏の夜，エルヴィナの誕生日に山々の上にきらめく星辰を眺めながら，エアハルトは父から無限な彼方の星と原子の極微の世界の話を聞いた．無限大と極微のこの世界はエアハルトを驚愕させたが，それよりも彼を考えこませたのは，無限についてのこの会話自体が刻々と過ぎてゆく時間のなかにある，ということに気付いた時であった．

友人と山に Jahrstock をさしたエアハルトは，時間の経過のうちにあって留まるもの der Bleibende の存在を知り，《時間と空間》に目を開くようになった．毎朝《窓を開け，心を開け》と彼を起した父親は歴史を好んではいなかったが，祖母のいるリンダウには自分の部屋と煙草ケースを留めていた．

1913年の春，エアハルトはボーデン湖のリンダウを訪れ，石だたみや広い破風，キラキラ光る窓に古きリンダウの香りをかぎ，Cadixer と呼ばれた穀物商人の曽祖父が残した古文書にはじめて接した．それは彼にとって《古い時代ではあったが，みずからのものであり，過去の中での現在，異質なものの中での親しいもの，和解した時間〈Zeit, versöhnende Zeit〉》であった．リンダウにはミュンヘンにはない形式性，風習，習慣があり，いわば同一時間内における別の時代があった．すでにエアハルトは，時間と空間とは一体をなし，ミュンヘンにおける時間とリンダウにおける時間とは違い，歴史は歴史書とはちがう，という予感を持っていたのである（X）．

1913年は多彩な年であった．バイエルン公が主催した体育祭の行事はエアハルトを感激させたが，すでにそこには時代のマハト・大衆が制服を通してその力を示しはじめていたし，同じバイエルン公の葬列に目をみはるエアハルトの傍で，父親達はツァーベルン事件を真剣に論じあっていた．8月1日には夕闇の中を動員令を告げる使者が村々を廻り，家族はミュンヘンに帰った．こうして戦争が始まったが，バルコンの上から眺めるエアハルトにとって，それはヘクトールの別れと共に始まったのではなく，兵士達によって芝が汚されることとともに始まったのである．ギムナジウムでもコルネリウスーネポスの時間にクルジウスの予備兵の歌が講義され，エアハルトもバイエルン防衛団体の信号隊に加わった．こうして彼とミュンヘンの周囲にも時代の流れはひたひたとおしよせていたのである（XI，XII）．

青年になるということは，はじめて死や人々の苦しみ，貧困を知ることだけではなく，自ら飢を知ることでもある．1916年から17年への冬は苦しい冬の始まりであった．無制限潜水艦作戦や戦死者の記事が新聞をうずめ，それはもはや《私達の新聞》ではなくなっていた．1917年5月から9月末迄エアハルト達も勤労奉仕に行き，馬鈴薯を作らされた．食糧はすでに悪く，南京虫に食われながら藁布団で寝るギムナジウムの生徒にとって，毎日は苦しみの連続であったが，それでも青空と馬鈴薯の葉の間には疲労の幸福も，見知らぬ土地の幸福も，退屈な時間の幸福もあったのだ．

一方エアハルトは，ボーデンスタイナー教授の下で中世史の詰め込みをやらされていた．歴史に対する興味があったのではなく，いわば知識への憎しみ又は妄想的な愛に駆られていただけであった．しかし，遂に教授が事実の関連について，さらにあの魔術的な言葉 Quellen, Urkunden について語った時には学問的衝動が起るかに見えた．しかし，それも障害にあって止んでしまった．

生活の条件は厳しくなっていったが，エアハルトと友人達の結びつきは固くなっていったし，又生活自体も続いていた．エアハルトは教練のあと，一人《魔笛》を観劇し，それにひたることも出来たのである．《Wir wollen uns der Liebe freuen, wir leben durch die Liebe allein.》

戦局は絶望的となり，再度エアハルト達は勤労奉仕にかり出され奴隷のような生活を送った．ブルガリアは陥ち，オーストリアは崩壊し，モスクワからは世界史が急を告げていた．ミュンヘンでも革命が起り，赤い腕章の兵士による協議会がつくられた．ひとつの世界が沈んだのである．管理人の酷使に耐えかねて，エアハルト達は鍬を持っておしかけた．《僕達はストライキをする．ミュンヘンでは昨日から革命が起っていることも知っている．戦争は終った．お前の為に働くのはもう御免だ．》こう言うとエアハルトは鍬を投げ出して咽び泣いた．他の少年達は肩に鍬をかついだまま立ちすくみ，一揆の粗暴な農民のように痩せ果て，ずぶ濡れで粗野に見えた．彼等は去り，一本の鍬だけが残った．

こうして帰って来たミュンヘンには，兵士協議会の名のもとに混乱が支配していた．しかしながら，祝賀か破局かを待つ少年にとっては，このような革命

後の混乱の最中にも生活が続いていくことは特に注目すべきことであった．劇場では依然として魔笛が上演されていた．しかし，ピナコテークの芝は汚れ果てていたのである．日曜日には，エアハルトはアウグスブルグで奉仕しているエルヴィナを訪ね，学校や革命を忘れ，ふたりでラートハウスや，キズタに実る果実を楽しんだ．古い時代の輝きは色褪せていたであろうが，エアハルトにとっては，それは時間，消え失せてしまった時間《Zeit, entschwundene Zeit》であった．

ミュンヘンが解放されると，第八学級の生徒は大部分一時志願兵としてバイエルン防衛軍に入り，カップ一揆に際してはルールで赤色分子と戦ったりした．このような生活のなかで，人々は互いに憎み合い，かっての平静は失なわれ，ギムナジウムの講義も粗末なものになっていったが，クリスチナやエルヴィナはエアハルトと友人達との友情がそこなわれないように気を配っていた．友人のひとりハウスホーファーを中心にして小さなアカデミーを作り，父将軍から地政学の話を通して極東の国々を知り，それらの国の立場から歴史を見ることが出来ることに気付いたのもこのグループにおいてであった．このような混乱のうちに彼はギムナジウムを終えた．戦争と革命は苦しい経験だったが，結局すべては生そのものに，自分達に贈られた生そのもの次第であることが解った．これからの生活も苦しいものではあろうが，生そのものは日々祝(コトホギ)《Lob-und Dankfest für das Leben》なのである．かくして，エアハルトは自らの生活を祝し，自らを解放してミュンヘンを離れ，外へ向って行った．（XIII, XIV）

III

研究者として評価する場合には，やはりハインペルは中世史家である．従って彼の歴史感覚が中世史研究に投影された限りにおいて問題としなければならないのだが，今は彼が中世をどのように把握しているかを詳述する余裕はない．しかし，僅かでも研究成果に触れてみれば，その《方法》が以上略述した彼の少年時代の体験と密接に結びついていることが解るだろう．中世を発展の相の下に，即ちモデルネという立場から近代を用意したひとの前段階として把えるのではなく，ひとつの世界として中世に入り込み，その中で生きてみることから始める彼の中世史研究の方法は，異質な世界に入り得るという前提があるのだから，確かにひとつのミスティシズムと見做すことも出来るかもしれない．しかし，現在を真摯に生きようとする程の者は，異質のものを包括している現在という時間の全体を把えたいと願うだろうし，その場合，異質なもののなかに入り得るということはラチオナールなものからは説明し得ない，として拒けてしまうことは出来ないだろう．

彼はこの書物のなかで，ハインペルとしての ich という言葉を全く使っていない．人間が成長する過程において，各世代はそれぞれ完結したものであると考えられている以上，50歳を越したハインペルが自分の過去を振り返ってみる場合にも ich war は使えないのである．あるのはボブとエアハルトなのだ．いうまでもなく，ボブもエアハルトもハインペルではある．じじつ彼は他の書物で《私は自分の少年時代の像において，今世紀の初めから大体1920年に至る市民社会の一断片を把えようとし，自分を見出そうと努力してみた．》と述べている．それにも拘らず，ich で叙述しなかったところにハインペルのヒストリスムスがある．

1871 年から 1914 年に至る時代は古き良き時代であった．もとより耳さとき者には《ひねもす，ぬかるみの中で，砕氷船が氷をたたくのが聞え》もしただろうが，バイエルンの一都市に住む少年にとっては，文字通り良き時代であった．しかし，戦後のハインペルにとっては，この良き時代は全く例外的な奇跡であって，ノーマルな状態と見做すことは許されない．それにもかかわらず，この良き時代に彼の決

定的な精神形成がなされたのである．だからこそ，この時代に形成された自己を再体験し，省察することがひとつの義務となってくるのである．

古き良きミュンヘンの日常生活の中で，同じ時間のなかにいくつもの現在があることを知り，又過去と未来が同時に現在を作り上げていることを知った少年は，第一次大戦の体験を通じて，これらの現在が《我々の現在》に流れこんでゆくことをも知った．このような体験から，ハインペルがその後の研究活動をどのように続けて行くかを論ずるのは本稿の範囲ではない．ここでは，ややもすると terribiles Simplificateur になりがちな我国の学問研究において，特にハインペルのように個々のものに愛情をそそぐ歴史家の，厳しくも豊かな自己省察に注意を払う必要があるという自戒から，彼の書物をとりあげてみたまでである（1960.12.29.）．

下記の書物を参照されたい．

Heimpel, H : Der Mensch in seiner Gegenwart. 1954. 1958.

derselbe : Kapitulation vor der Geschichte?. 1956.

derselbe : Deutschland im späteren Mittelalter.

Baedekers : München und Umgebung.

なおIIにおける引用は，すべてハインペルのものである．